

一年生合同バンド

● ペルセウス —— 大空を翔る英雄の戦い Perseus —— a Hero's Quest in the Heavens 八木澤 教司 Satoshi Yagisawa

京都府立桃山高等学校吹奏楽部委嘱作品。同校吹奏楽部は八木澤氏が吹奏楽界にデビューして以来、交流している大切なバンドの一つでいと立ちの笑顔が印象的な暖かい雰囲気を持ったバンドだそうです。顧問の安原敏夫先生と生徒さんはコーラルを心から愛し、毎年夏の吹奏楽コンクールで演奏する作品には、彼らのオリジナルの歌詞をつけて、常に歌うことで仲間意識を再確認していくという伝統を持っているそうです。この「歌う」という場面を生かした、かつ宇宙や星に関連した夢のある題材を用いてほしいと安原先生からの強い要望により、最も相応しいと思われる「ペルセウス」が題材として選ばれました。

これは有名なギリシャ神話でペルセウスがお化け鯨クラークの生け贄にされた王女アンドロメダを救い出すといった冒険ストーリーです。1981年イギリスで制作されたデズモンド・デイビス監督の映画「タイタンの戦い」から多くの影響を受け作曲されました。

楽譜はオランダのデ・ハスケ社より最近出版されましたが、今回は作曲者のご厚意により、9月に楽譜を借用いたしました。11月19日には練習に来て下さり、熱い指導をしていただきました。

● ウイズ・ハート・アンド・ボイス With Heart And Voice ギリングハム David Gillingham

「ベトナムの回顧」「目覚める天使たち」等の作品で吹奏楽界に新風を吹き込んだ後も意欲的に新作を発表し続けているギリングハム。賛美歌をテーマに様々な変奏でコーラージュ風の音楽を編み上げるという、彼の得意とする手法で書かれた本作は、ミネソタ州アールバレー高校の創立25周年を記念して委嘱され、作曲された曲で、古い賛美歌をテーマに展開されています。その賛美歌は元々ギリングハムのお気に入りの曲であったが、この賛美歌が同校の校歌にもつかわれていたことに運命的なものを感じ作曲に着手したそうです。曲の冒頭は静かで神秘的な響きをファゴットと打楽器群によって表現されます。衝撃的な音楽から、やすらぎのメロディをフルートが美しく奏でます。希望に満ちたホルンの音色、躍動的な打楽器と切れ味抜群の金管、そしてチャイムを響かせテーマを堂々と鳴らし、スピード感も加わりフィナーレへと続きます。

● スーザの休日～星条旗よ永遠なれ～ Sousa's Holiday スーザ／真島俊夫 J.P.Sousa / Toshio Mashima

行進曲「星条旗よ永遠なれ」はスーザが40歳代のとき、1896年に書いた作品です。人々を鼓舞する勇壮なマーチに仕上げられているこの曲は、スーザの最高傑作であると同時にアメリカの第2の国歌とも言えるほど有名な曲になりました。この曲はその有名なマーチを真島俊夫氏がポップスバージョンにアレンジしたもので、元の行進曲に近い部分と、対照的に弾けるようなポップス調の部分が織り交ぜられた、きわめて楽しいアレンジになっています。ジョイントの一年バンドの名物とも言える鈴木準二先生のポップス演奏に注目です。

基礎合奏は
全員で立って



二年生合同バンド

● 交響的序曲 Symphonic Overture

J.バーンズ
J. Barnes

この作品は、ワシントン空軍バンドのために作曲されたもので、アメリカ吹奏楽指導者協会の大会が1991年3月にアリゾナ大学で行われた際、この作品を依頼したJ. M. バンクヘッド氏の指揮により初演された。コルネットとトランペットによるファンファーレで始まる。米空軍バンドはチェロの入った編成で、中間部にはチェロのソロが書かれている。普通はチェロのかわりにユーフォニアムが演奏する。

バーンズの豊かな音楽性が十分に発揮されている名曲である。

● バンヤルカ Banja Luka

ヤンデハーン
Jan de Haan

オランダのヤン・デハーンは世界的に活躍する指揮者であるとともに、作曲家、編曲家として数多くの作品を手がけている。(東京佼成ウインドオーケストラで自作や他の作曲家の曲を指揮したCDも出ています。)作曲は委嘱作品で占められており、その人気ぶりを伺い知ることが出来る。現在は吹奏楽の楽譜やCD出版で実績のあるデ・ハスケ社の代表という要職にある。この作品はオランダで行われた国際ホルン・フェスティバルのために1995年に作曲された。

1990年代に民族間の紛争として国際問題となった、ユーゴスラビアの終わりなき内戦を表現した作品で、導入部から早くも戦闘のイメージが不協和音で奏でられる。前半部は祈りや平和といった希望的な展開も見られるが、後半部では、この希望が時期尚早であったこと、軍隊の行進、傷つく人々、激しい内戦などが激しい音楽で表現される。サイレンの音が鳴り響きクライマックスを迎えるが、最後は一転して静かな音楽で曲を閉じる。一楽章形式の作品で、演奏時間約14分。アルトサックスのソロにも注目。

● 王は受け継がれゆく The King Go Forth

I	教会	The Chrch
II	人民	People
III	国家	The State

E.グレッグスン
Edward Gregson

名作「剣と王冠」の続編にあたる作品で、ロイヤル・シェイクスピア劇団の舞台音楽をベースに1996年に作曲された。米空軍バンドの委嘱によるもので、英国を揺るがした中世の王権争いを舞台にした、前作よりもさらに壮大かつロマンティックな作品である。「剣と王冠」同様、元々は200人編成に書かれたものです。オケ、吹奏楽、映画音楽、ジャズ、合唱……と一大エンターテインメントになっています。

第一部「教会」はトランペットで開幕後、二つの単旋律聖歌「神の子羊」(テナー独唱)と「怒りの日」(男声合唱)が聞かれます。(幻想交響曲第5楽章でも聴かれるメロディ)

第二部「人民」は一転して明るめの曲となる。14世紀のポピュラーソング「夏は来たりぬ」(リコーダー)とそのジャズ風なヴァージョンを居酒屋の歌風に演奏し、もう一つの収穫の歌「人生とは何か」をアイルランド風につないで静かに終わります。

第三部「国歌」では、「剣と王冠」でも用いた戦いの音楽で開始され、クライマックスで葬送行進曲となり、戴冠式の音楽へと続き、劇的かつ感動的なエンディングを迎えます。まさにイギリスらしく、またグレッグスンのセンスが良く表れた曲です